

平成26年2月12日、市長と政策秘書課職員との話について紹介します。

先日、東名古屋医師会主催の公開講座「平穏死を迎えるために」に参加させていただきました。

講師は、兵庫県尼崎市で在宅医療に携わっておられる長尾クリニック院長の長尾和宏さんで、「平穏死」に関する著書を多数お持ちのお医者さんです。長尾医師によると、全国各地に呼ばれて講演をされているそうですが、医師会主催はまだまだ少ないらしく、医師自らが「死」について考え、市民のみなさんと語り合う場を持つことは、大変素晴らしいことだとおっしゃっていました。

当日は、開場と同時に満席になり、みなさんの関心の高さを感じました。「住み慣れた自宅、地域で最期を迎えるには…」について、家族で、地域で考えるきっかけになる公開講座でした。

こうした場を設けていただいた東名古屋医師会のみなさんに、改めて感謝の意を表したいと思います。

「待てない」社会

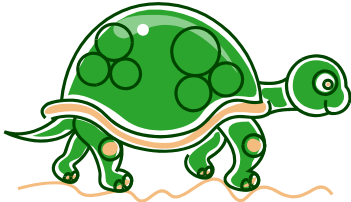
長尾医師の講演の中で、今の現代医療では、「待てない」というお話が印象に残りました。

- ・脱水 → 点滴
- ・低栄養 → 胃ろう
- ・貧血 → 輸血
- ・高血糖 → インスリン
- ・高血圧 → 降圧剤
- ・呼吸困難 → 酸素吸入 などです。

医療現場だけでなく、患者自身も、家族も「待てない」方が増えていると紹介されていました。「待てない」医療現場では、平穏死を望んでも、なかなか難しいそうです。自分が望む最期を迎えるためには、家族で元気なうちからよく話し合っしてほしいと話されていました。

一方で、私たちの日常生活はどうでしょう。自分の子どもを待つことすらできず、「早くして！」と急がせてはいないでしょうか。

これまでの日本では、カメよりも、目標に先にたどり着くウサギがもてはやされました。これからの降りていく時代では、ゆっくり歩むカメが評価される時代かもしれません。ウサギはカメを待つことが楽しくなるかもしれません。



市民と行政が一体となったまちづくりをしていきたいと考えています。そのためには、市民のみなさんと職員が一緒に考えることが必要だと思います。いろいろな考えを持った人たちが集まれば、もめることもあるでしょう。議論が少しも前に進まないこともあるでしょう。取組んできたことが、一からやり直しになることもあるかもしれません。そのとき、少し「待つ」ことができれば、違った視点から物事を見ることができるようです。

もちろん、行政の仕事には、緊急性を要するものもありますが、そうしたものの以外で、市民のみなさんと一緒に取組んでいくべき内容のものは、「待つ」ということが必要だと感じています。

～市長の話を聞いて～

携帯電話のメールや LINE などでは「返事が遅い」と不安になる人がいたり、空調器具もボタン一つで快適な状態になったりと、「待つ」ことがより苦手になってきているように感じます。私も日常生活で、「早く、早く」と相手を急がしている場面が多いです。

長尾先生の話の中で、在宅医療の現場では、ゆっくり、手づかみでも自分で食べてもらうことが大切だとありました。介護する側の理論で介助が行われていて、自分でできることもできないようにしてしまっているそうです。私も、数年後には、家族の介護をしていく立場になります。せっかちな私は「待つ」ことができるのか不安です。今から、さまざまな場面で、「待つ」訓練をしていこうと思いました。